口差点（こうさてん）

稲作を大切に

今夏は全国的に、お米が販売店やスーパーからなくなる現象が起きた。理由はいろいろあると思われるが、近年にない現象である。9月に入り、新米の取り入れが始まれば、この現象は収まってくるだろうと政府は言っていた。

そういえば、私が小中学生の頃だったと思うが、政府は早場米奨励金制度をつくり、米不足解消を図ったようだ。そのため、両親から「9月中に米を出荷すれば、奨励金が多くもらえるので、一生懸命に手伝え」と言われた。9月中旬になると手作業で稲を刈り、はぜ掛けをして、下旬には脱穀をして、月末には供出を終えた記憶がある。

姉たちはもちろん私も家内労働力で、休みの日は朝から晩まで農作業に没頭した。その後、姉たちが1人また1人と結婚して家からいなくなると、労働力が不足してきた。そのため、大学生になってからは数人の友を誘って泊まりがけで取り入れ作業を手伝ってもらった。大学は9月いっぱい休みだったので好都合であった。

昭和の米不足を解消するため、早場米奨励金制度で米は確保されてきたと思う。そのうちに米が余り始め、減反政策などで一部の田んぼは雑草が生い茂ったり、宅地化されたりして様変わりしつつある。日本が国内で賄うことのできる作物は米だけなので、行政はもっと自給率アップに心掛けなくてはいけないと思う。お米は日本人の命にかかわる食糧であるから、弥生時代から続く稲作を大切にする必要がある。

（安曇野市穂高、荻原義重、80歳）